『ロクサーナ』考

宮崎孝一

ダニエル・デフォー（一六六〇？―一七三一）と言えば、大多数の人々がまず思い起こすのは『ロビンソン・クルーソー』（一七一九）であろう。この作品をデフォーの代表作とすることに私も反対ではない。無人島に漂着して独力で自己の生活を築いていくクルーソーの営為に、我々は、人間の経済生活の原型を示された思いがし、また、その語り方の巧みさと迫真性に魅せられるのである。

しかし、今ここに論じようとする『ロクサーナ』（一七二四）にも、その理由は異なるにしても、『クルーソー』に優るとも劣らぬ興味と意義を我々は認めるのである。「意識の流れ」の手法の名手ヴァージニア・ウルフ（一八八二―一九四一）のように、デフォーとは全然傾向が反すると思われる作家さえ、その『世間並の読者』第一集（一九二五）に収められているデフォー論で『モル・フランダーズ』（一七二二）と『ロクサーナ』とについて「文句なく偉大と呼び得る数少ないイギリス小説の中に入れられるべきもの」と推賞しているほどである。以下、『ロクサーナ』に関する私なりの二、三の考察を記してみたい。

(一) ロクサーナの描き方

ロクサーナは簡単に言えば、高等娼婦である。こういう

種類の女性の生活を不用意に描けば、結果は次の二つのうちのどちらかに陥りがちであろう。すなわち、読者の卑俗な覗き趣味をくすぐるか、または、潔癖な読者の顰蹙・反撥を買うかである。この小説も部分的に見れば、この傾向のいずれとも無縁であるとは言えない。しかし、全体としては作者は巧みにこれらの危険を脱していると思う。すなわちこの作は、単なる好色小説の域を越えた、人間性への深い洞察を示すものになっているし、また、表面的な道徳律のみでは裁断できぬ複雑な人生問題をも提示しているのである。

ロクサーナの、正式な結婚によらぬ男女関係の最初の相手は、彼女の家主である宝石商であった。彼女がこの男を受け入れるに至るまでの内面的葛藤は委曲を尽くして語られ、多くの読者にとって、反感よりもむしろ同情をそそるものとなっていると言えよう。無能な夫が逐電した後、五人の幼い子供をかかえて残された彼女の極度の窮乏と絶望、そこに救い主として現れた家主、なおもためらう彼女に対する女中エイミーの指嗾は、ついに彼女がそれまで奉じてきた掟を破る決心をさせることになる。

この宝石商が強盗に殺された後に、ロクサーナが外国の王族の情婦になる段階では、既に一遍埒を超えた女性のことゆえ、最初のときほどの抵抗は感じなかったであろうと肯かれる。それにこの頃の彼女が、以前貧窮と屈辱に苦しんだ反動からか、並はずれた虚栄心と貪欲に支配されるようになっていることを思えば尚更である。その後の彼女が富裕なオランダ商人と肉体関係を持ちながら、奇矯なフェミニズムをかざして正式な結婚生活に入ろうとしないこと、さらにロンドンに戻った彼女が貴顕紳士を集めて仮面舞踏会を催すこと、そして、ついには国王の情婦にまで「出世」することも、美貌に支えられた彼女の虚栄心と物欲を思えば、当然の成り行きであったろうと感じられる。

しかし、余りに露骨に彼女の虚栄心と貪欲のみを正面に押し出したのでは、せっかく最初同情を感じた読者にも、そっぽを向かれる恐れがある。そこで作者は、折あるごとに彼女に殊勝な反省や悔悟の言葉を述べさせることによって、読者の心をつなぐ工夫をしている。しかもその言葉は、時に非常に極端な自己嫌悪的言辞となり、読者はつい、「あんたもいろいろ事情があるんだから、余り固いことは言いなさんな。自分ばかり責めるもんじゃないよ」と慰めたい気持に誘われるほどである。「あの頃の私は、宮

様はおろか、お金のためとあれば宮様の従僕とだって寝たことでしょう」などという言い方はその例である。しかし、ロクサーナが度重なる悔悟の言葉にもかかわらず、ついに自分の生活の様式を改めようとしないことは、彼女の言葉が心からのものではないのではないかという疑いを読者にいだかせることになろう。しかしながら、彼女がその生き方を変えてしまったら、この小説もまた全く趣きの異なったものになるわけで、ここにデフォーのジレンマがあったはずである。

また彼女は、自分の相手になる男たちの愚かさ、ときには卑しさも批判することを忘れない。プリンスが自分のような過去を持つ女を、それとも知らず、寵愛し、あらゆる手段を尽して歓心を買おうとするが、それはまっ直ぐ地獄へ通じる道を走っているにほかならないと彼女は見極めているし、また、彼女を金の力で自分のものにしようとしたイギリスの老貴族が、純粋な愛について滔々と弁じ立てることに彼女は失笑を禁じ得ない。これらにより読者は、ロクサーナが虚構の栄華に有頂天になっているわけではなく、自分の行為と相手との真の姿をはっきり見つめていることを知り、こういう立場に置かれた女性を憐れむ気持に誘われる。

ロクサーナは作中人物の知らない事実を読者にだけは知らせる、いわゆる劇的アイロニーの技法を時々用いる。彼女の莫大な財産に目をつけたユダヤ人が、これを詐術や脅しによって自分のものにしようとするのを、彼女が巧みに躱すところなど、読者は予め彼女の方策を知らされているがゆえに、ユダヤ人の切歯扼腕ぶりをロクサーナと共に楽しむ結果になる。また、仮装舞踏会のとき彼女はトルコ衣裳を着て斬新な踊りを披露することによって満場の喝采を浴びるが、「このとき私が帯につけていた大きなダイヤは、実は本物ではなかったのですが、どなたもそれに気づきませんでした」と、読者にだけはそっと告げている。こういう語り口によって、読者は彼女の側に引き入れられた思いがし、何か彼女が他人ではないような気持に導かれる。読者を味方につけるための巧みな方法と言えよう。

(二) エイミーの役割

エイミーは、ロクサーナと一心同体的な存在である。家主の攻勢に会って去就に迷っていたロクサーナが、エイミ

ーの巧みな説得によってついに陥落することを前に見たが、その暫く後では、今度はロクサーナの方が積極的にエイミーをけしかけて、この同じ家主と彼女を共寝させることになる。こうしてロクサーナはエイミーを自分と同じレヴェルに引き降してしまうわけである。その後ロクサーナがプリンスの恩顧を受けるようになると、エイミーはプリンスの侍従と情を通じることになる。まことに「主が主なら家来も家来」(Like mistress, like servant)という諺のままの関係である。

エイミーとロクサーナとは共通の心情の持主であるが、二人の違う点は、エイミーの方がロクサーナよりも考え方が単純であり、直線的で迷うことが少ないことである。それ故エイミーの思考は簡単に行動につながる。ロクサーナが心の底では欲しながら逡巡していることを、エイミーが決断させ、または代行してやる趣きがある。正にエイミーはロクサーナの「分身」(alter ego)であると言えよう。冒頭において飢に迫られたロクサーナが、自分と子供たちの不幸を思い、涙にくれるのみで何の手も打てないでいる間に、エイミーが具体的な計画を立ててすべての子供たちを親戚に引き取ってもらい、ロクサーナの運命の展開を図るのはその手始めである。次にはロクサーナと宝石商の間を取り持ち、この宝石商が死ぬと、その財産がロクサーナの手を離れて彼の縁者たちのものにならないようにエイミーが骨を折る。ロクサーナの蒸発した夫がフランス軍隊に入っていることが分ったときも、彼に関する調査を引き受けるのはエイミーである。そして、ロクサーナが社交界を隠退して静かな生活に入りたいと考えると、たちまちにエイミーが適当な住居を探して来る。その他ロクサーナの人生の舞台が回るごとに、エイミーが必ず実際的な事柄の処理を買って出ることになる。

エイミーのそのような役割の最後が、ロクサーナと最初の夫との間に生れた子供たちを、母親の存在を知らせることなく、それまで彼らが置かれていた境涯から救ってやる仕事である。エイミーはそれを大体において手際よく処理するが、ただ長女スーザンに関して、飛んだどじを踏むことになる。ロクサーナが自分の母親に違いないと執念深く主張するスーザンを、エイミーは主人を思う余り殺害するに至るのである。それより前、スーザンを消す意図をほのめかすエイミーにロクサーナは腹を立て、家から追出してしまうが、しかし、彼女はエイミーがその決意を実行する

のを阻むための具体的な努力は何もしていない。ロクサーナにとって、スーザンを自分の娘だと認めることは、彼女が女中として仕えていたペルメルの邸宅における自分の淫蕩な生活振りを世間に知られることであり、とりわけ波瀾の半生の後にようやく摑んだオランダ商人との平安な結婚生活を破壊されることなのである。だからこそロクサーナは、「もしあの娘が、病気とか普通の原因で死んだとしたら、私はほとんど涙も流さなかったことでしょう」と言っている。彼女は娘の死を内心願っているのである。それ故、エイミーの凶悪な意図に気づいても、敢えてこれを阻止しようとはしないのである。こうしてロクサーナは自らは手を下すことなく、自分の望む結果を招いたことになる。

このように、分身エイミーの存在は、ロクサーナの優柔不断さを補い、また、彼女が自ら事に当った場合の卑俗、醜悪、冷酷等のそしりを免れさせることによって、ロクサーナに向けられるべき読者の批判をそらし、あるいは軽減させる効果を挙げていると言えよう。

(三) プロットの有機性

デフォー以前の、また、デフォーにおいてもこの作以前の小説は、目新しい事件が次々に継起して読者の興味をそそるが、事件相互の間にはさして連関も発展もないものであった。つまりエピソードの連続といった態のもので、それらをつなぐのは、ただ主人公が同一人物だというに過ぎない、いわゆるピカレスク・ノヴェル (picaresque novel) であった。ところが『ロクサーナ』においては相当な程度までプロットの有機的連関に対する配慮が見られ、これ以後のイギリス小説の傾向をも予示するものとなっている。

まず夫に捨てられたロクサーナが直面する窮乏の話は、小説の末尾に近く、彼女がその家に下宿することになるクエーカーの婦人が、夫に捨てられ、子供たちをかかえて、かつてのロクサーナほどではないまでも苦しい生活を送っている話へとつながっている。この様を見たロクサーナは、昔の自分の苦労を思い出してクエーカーに同情し、数数の贈り物をして彼女を助け、励ましてやることになる。また、行方が知れなくなり、彼女が二度とこの世で会うこ

とはあるまいと思っていた夫も、意外にもフランス軍隊に属しているのを宮廷で見かけ、その日常生活を調べ、彼の相変らずののらくら振りに愛想を尽かすことになる。オランダで同棲生活を送った後、結婚に関する意見の相違から別れた商人とも、何年かの後にロンドンで再会し、今度は結婚することになる。フランスで深い仲になり、その後別れたプリンスが、また暫く後に今度は彼女を正式の妃にしようとして探しているという話も聞えてきたりする。そしてこの小説中、最大の因果物語は、幼いときに手離したままになっていた娘スーザンが、一人前の年頃になってロクサーナを尋ね当て、母子の名乗を挙げてくれと彼女に迫るところである。子供はロクサーナの過去を現在につなぐ、否定しようにも否定し得ぬ具体的存在であり、物語の有機的展開を俄かに活気づける重大な役割を担うことになる。

さて、ずっと滑かな発展をしてきたこの小説が、結末はまことに呆気なく終っている。オランダで数年栄えた後、ロクサーナもエイミーもひどい逆境に陥ることになったと、ほんの一、二行で済まされてしまっているのである。それは一体なぜであろうか。作者が、これ以上詳しく話し続けることに厭きて簡単に片づけてしまったのだという考え方もできよう。しかしまた、別の見方もあり得る。海賊や泥棒によって金を得るよりも、淫らな性関係によって金を得る方がいっそう醜悪で罪深いと考えていたデフォーとしては、ロクサーナの晩年を恵まれたものにすることは、はばかられたであろう。しかし、ロクサーナとエイミーとの罪の報いを事細かに具体的に述べたらどうなったであろうか。エイミーは早晩スーザン殺害の犯人であることが突止められて逮捕され、絞首刑になるであろう。ロクサーナもこの関連で取調べを受け、罰せられることはないにしても、その過去が世間に、とりわけ夫のオランダ商人に知られることになり、せっかく身に帯びた貴族夫人の称号はおろか、まともな一個の女性として世に立交る資格さえ失う破目に陥ることであろう。デフォーは清教徒であると同時に芸術家でもあった。これまで、その素行がどうであろうとも、機転が利いて負けず嫌いの、魅力ある美人としてのロクサーナを描いてきた作者としては、彼女の惨めな末路を克明に記すのはしのびない思いがしたことであろう。また、作品としての効果から言っても、読者を満足させる適切な結びとはならなかったであろう。

(四) 時代の二重性

この小説で扱われている出来事はいつ頃起こったのであろうか。この本のタイトル・ページには、「チャールズ二世の時代には貴婦人ロクサーナの名で知られた人」と記されている。この国王の治世は一六六〇年から八五年までである。そして、ロクサーナが蓄財のために何度も相談に乗ってもらうロバート・クレイトン卿はチャールズ二世の時代に高名だった人で、一七〇七年に死亡している。この限りではタクトル・ページの記述に符合する。しかし、この小説の冒頭では、ロクサーナは一六八三年ごろフランスからイギリスに渡ったことになっており、そのとき十歳ぐらいだったと述べられている。従ってチャールズ二世崩御の一六八五年には、彼女は十二歳のはずである。さて、彼女は十五歳で結婚し、結婚生活は八年間続く。すると、未亡人になったときの彼女は二十三歳くらいで、時代は一六九六年前後である。その後一年ほどで家主と同棲するようになり、三年後にフランスへ渡る。大陸で十五年ほどを過してイギリスに戻り、八年間を華やかな生活に過す。従って彼女がロクサーナの名で社交界に嬌名を馳せたのは、一七一五年頃から後のこととなり、すでにジョージ一世（在位一七一四―一七二七）の時代であって、彼女は五十歳またはそれ以上になっている計算になる。するとタイトル・ページに記されている年代との間に大きな開きが出てくる。

このような年代の齟齬が生じたのは、デフォーがこの小説を暇々に少しずつ書いていったため、時代の推移に関して思い違いをしたのだという説もある。しかし、これはいささか単純すぎる憶測と思われる。元来デフォーは過去の出来事を扱っても、それが発表される時代に与える影響を考えて小説を書く人であった。例えば『ロクサーナ』の二年前に出版された『疾病年日録』（一七二二）は、忠実に一六六五年の事件を記録しているようであるが、一方では一七二一年にマルセーユでペストが発生したという知らせによって、イギリスにも再びこれが流行するのではないかという恐れが生じ、検疫制度強化が叫ばれるようになった風潮にも乗じているのである。同様に『ロクサーナ』においても、デフォーは表面上チャールズ二世の治世のこととしながら、実はこの作品の書かれた時代、すなわちジョージ一世の時代の世相を写そうとしたのではないか。

王政復古時代と呼ばれるチャールズ二世とジェームズ二世（在位一六八五―一六八八）の治世は、不羈、好色、遊蕩の気が世を被った時代として名高いが、これに続くウィリアム三世（在位一六八九―一七〇二）とアン女王（在位一七〇二―一七一四）の時代は、比較的健全な気風が支配的となった。ところが、次のジョージ一世の時代は、チャールズ二世の治世にも劣らず、軽佻浮薄な風潮が高まった時代であった。王にも皇太子にも妾がいたし、王と皇太子とは仲違いしていた。とかく悪の温床となる劇場やオペラ館が隆盛を極め、街には、いかさま師やインチキ投機業者、すりや売春婦などがはびこっていた。とりわけこの時代の特色となったのは仮面舞踏会であった。

仮面舞踏会がロンドンで行われるようになったのはジョージ一世の治世の初期からで、王室の庇護の下に行われた。舞踏会場では賭博も同時に開帳され、歓楽は夜九時から翌朝七時まで徹夜で続けられたという。仮面と仮装のため、参加した人々の正体も階級も分らないから体面にこだわる必要なく、性的放縦も思い半ばにすぎるものがあった。このような行事が社会に及ぼす悪影響については世論がかまびすしく、デフォーも種々の機会にこの問題について論じている。

ところで、この頃チャールズ二世の時代の宮廷秘史といったものが次々に出版された。そこでデフォーはこの種の記録の形を借りて、一応チャールズ二世の時代のこととしながら、実はジョージ一世の時代の無軌道ぶりを諷刺しようとしたのであった。ロクサーナの催す仮面舞踏会も、彼女が王の囲い者になることも、この小説の書かれたのと同時代の出来事に言及しているのであり、読者にもその意図は十分通じたはずである。そう言えば、この小説のタイトル・ページに「ドイツに渡ってウィンツェルハイム女伯爵と呼ばれ……」と記してありながら、内容には全然そんな話が出て来ないことに我々は奇異の感を持たされる。実はこれは、ジョージ一世にダーリントン女伯爵およびシュレンブルグ女伯爵という、悪評高い二人のドイツ人の妾がいたことを暗示しているのだという。

右に見たのが、この小説の時代が二つの相隔たる時代に設定されている理由である。

なお、ロクサーナという名前はこの小説の女主人公の実名ではなく、舞踏会の席で彼女がトルコ衣裳を着て踊ったとき、人々が感嘆して叫んだのが元になってつけられた名

前であった。実在の人物としてのロクサーナは、アジア西部の古国バクトリアの王女で、紀元前三二七年にアレグザンダー大王の妃になったが、大王の死後マケドニアへ行き、投獄されて、紀元前三一〇年に殺された人である。イギリスの劇作家ナサニエル・リー（一六五三?―一六九二）作の悲劇『寵を競う王妃たち』(*The Rival Queens*, 1677)では、彼女はペルシャの女王スタトリアと共にアレグザンダー大王の妃となり、大王の愛を競うことになっている。

ところで、一七一四年にアントニー・ハミルトンが発表したチャールズ二世時代に関する回想記『グラモント伯爵の生涯に関する覚え書き』に次のような記事があるという。「デューク劇場に属し、『寵を競う王妃たち』のロクサーナの役を完璧に演じ、ついに彼女自身がロクサーナと呼ばれるようになった美しく優雅な女優がいた。この女性をオックスフォード伯爵が愛するようになった」デフォーはこの記事にヒントを得て、ロクサーナという名前を採用したのかもしれない。いずれにしても、この異国風な名前が読者の好奇心を捉えたことは事実であろう。

（本稿は、もと作品解説として書いたものであるため、論文の体をなしていない。御了承を請う次第である）。